

中学・高校における英語教育の実践報告

長尾 きぬ代

Report on English Education at a Secondary School

NAGAO Kinuyo

Abstract : This paper reports on how English education is carried out at Konan Girls' Junior and Senior High School, affiliated with Konan Women's University. The discussion consists of three parts : English classes by Japanese English teachers and by native English teachers, and the international education, which supports English education from different sides.

This paper includes how this school makes use of its 6-year integrated education system as a private junior and senior girls' high school and what kind of matters the English teachers are coping with. This report is based on the answers to a questionnaire given to the English teachers who have classes in the 2016-17 school year. Teachers describe the materials they use, the aims of their classes, and the challenges they face and are trying to overcome.

As for international education, the school has exchange programs with schools in Germany, Australia, the U.K., the U.S.A, and Korea, and exchange students from all participating countries contribute a great deal to the mutual understanding of different cultures and to Japanese students' motivation to study English.

要旨 : 本稿は本甲南女子学園の中学・高等学校で行われている英語教育について報告するものである。英語の授業がどのような形で進められているか、日本人教師による授業、ネイティブ教師による授業、また、英語教育を違った面から支える国際理解教育という3点から報告する。私立の中高一貫の女子校としての特性をどのように活かしているか、また英語の授業担当者はどのような問題を抱え、それらにどう対処しているかについて考察したい。そのための資料として、2016年度の英語科目のそれぞれの担当者に、使用教材、授業のねらい、工夫している点、今後の課題などについてのアンケートに答えてもらった。

国際理解教育に関しては、甲南女子中高が持っているドイツ、オーストラリア、イギリス、アメリカ合衆国、韓国の学校との交換留学制度について、また、日本を訪れる交換留学生在が相互の異文化理解と甲南女子生の英語学習の動機づけにいかに関与しているかについて報告する。

はじめに

中学1年から高校3年までの間は、人間の一生のうち、心身共に最も成長の著しい時期である。その中学高校の段階で良質の教育を受けられるかどうかは、その後の人生に大きな影響を与え得る重大な問題である。中でも英語は、以前より中学・高校の生徒にとって、進学準備のために大きな意味を持つ教科であったが、それに加えて、昨今、社会全般において英語の運用力を身につけることの重要性が増している。さらに女性の活躍がこれまで以上に期待されるのが現代社会である。将来のキャリアにおいて、能力が十分に発揮できるような中高生をどう育てるか、その英語教育の方法が問われる時代といえよう。

それでは、現在中・高等学校ではどのような英語教育が行われているか、私立の中高一貫の女子校の英語教育に焦点を絞って考察してみたい。英語教員は、生徒たちの発達年齢に応じて、動機づけをし、適切な教材を用意し、有効な言語活動を行うべく全力を尽くしている。本稿では、その一例として甲南女子中・高等学校での実践を報告する。そうすることで、甲南女子中高における現象や問題だけでなく、広く中高生の英語教育現場における問題点に対する解決策を見出すヒントが見つかるかもしれない。成長に伴う変化を観察し、中高生を対象とする英語教育のあるべき姿を模索することが、これからの英語教育に何らかの意味を持つのではないかと考える。

最初に、甲南女子中・高等学校について少し説明を加えておきたい。甲南女子中高は、本来、大部分の生徒が甲南女子大学に進学する学校であったが、社会の大きな変化の影響を受けて、甲南女子大学にはない学部や男女共学の大学や国公立大学に進学を希望する生徒が増えた。また、さまざまな資格を取得し、社会で活躍することに夢を描く生徒や保護者が増えたこともあり、卒業生の進学先は多岐にわたる。学校としては人間教育を重視する甲南女子の伝統を守りつつ、もう一方で自学創造、個性尊重という教育方針に立ち、生徒自身の自己実現を助けるために、生徒の希望を最大限に尊重することを第一に考えた。その結果、2008年度に国公立大学進学希望者のためのSアドバンスコースが設置され、スタンダードコースとの2コース制が始まった。当初、Sアドバンスコースは1クラスであったが、2009年度には2クラスになり、スタンダードコースが3クラス、Sアドバンスコースが2クラスの1学年5クラス体制となった。

新体制開始前は、さまざまな不安の声が学校の内外にあった。Sアドコースには勉強や進学にしか興味の無い生徒が集まり、校風がまったく変わってしまうのではないかと、部活動も活発に行われなくなってしまうのではないかといったものであった。しかし、実際にはSアドコースにも部活動や学校行事、海外研修など、さまざまな活動を通して学校生活を十分に楽しみたいという生徒たちが集まるようになった。スタンダードコースの生徒も、良い意味で競争意識を掻き立てられ、学力を伸ばすためには地道な努力をするという謙虚な姿勢が顕著になった。したがって、学校全体としてはそれまで以上に、個性を尊重する雰囲気が醸し出されたような印象を持つ。ただ、教員の方は、教科の指導、総合的な学習の立案から実施、部活動の指導といった教育活動に、また、幅広い個性を持った生徒たちの指導にと、多忙を極めるといった状況に追い込まれてはいる。

さて、実際にどのように英語の授業が進められているかを2016年度の例を中心に、詳しく述べることにする。まず、使用する教材について記しておきたい。検定教科書については、中学でNew Crown(三省堂)、高校で「英語コミュニケーション」はBig Dipper I II III(数研出版)、「英語表現」はVision Quest I II(啓林館)を採択しているが、それらに加えてNew Treasure(Z会)を使用している。その他の補助教材については、表1の中学校英語教育カリキュラム、表2の高等学校英語カリキュラムに示している。

New Treasureシリーズは多くの私立中高一貫校で使用されているテキストであり、検定教科書のNew Crownと比較すると、それぞれの文法項目の配列はほぼ同じであるが、単語数はかなり違っている。New Crownは中1から中3までで、学習指導要領で示された約1200語程度であるが、New TreasureではStage 1だけで、1200語、Stage 2で1000語余り、Stage 3までで、約3300語、Stage 5までで約6300語、即ち、現行の検定教科書の2倍以上の単語数を収めている。また、中学1年が使い始めるStage 1のLesson 2から各課にReadと呼ばれるセクションがあり、長文に触れる機会を持つし、文法項目の説明についても高校の領域に踏み込んだものを含む。従って総ページ数も2倍以上といったテキストである。

そのため、英語が得意でどんどん吸収することができる生徒にとっては、充実した内容のテキストであるが、当然全員がそういうわけではないので、教師、生徒の双方にとって工夫と努力が要求される。シラバスが決まっているが、教師の方も、ある程度生徒の様子を見ながら進めていくので、コースによっても、学年によっても、進度は違ってくる。ただし、常に少しでも高レベルの教材、授業内容を求める保護者はいうまでもなく、生徒たちも少し難しいテキストに挑戦することに意義を見出している様子が感じられる。英語好きの生徒が比較的多く、コミュニケーションをとることに楽しさを見出す生徒が多いのも女子校の特徴といえるであろう。毎年、高校の卒業式で、特に英語学習に熱心に取り組んだ生徒が同窓会より表彰される。英検、TOEIC、TOEFL、IELTSなどを受験し、英検準1級レベル以上の成績を収め、今後の成長が期待できる生徒が授賞の対象であるが、当初は2~3名であったのが、近年は10名前後と大幅に増えたのも喜ばしいことである。

問題点としては、中高一貫の弊害である、中2・中3の時期の「中だるみ」がある。高校入試がないため、目

表1 中学校英語カリキュラム

コース	スタンダード		S アドバンスト		両コース共通
科目	英語	英語 LL	英語	英語 LL	英会話
時間/週	3	2	3	2	1
中学1年	アルファベット/フォニックス				学校で使う英語
	NT 1 L1~L9		NT 1 L1~L12		基本的な事柄/日常生活
		文法問題集		文法問題集	日本や他の国々の生活
	NT Penmanship				語彙:
	NT Workbook, Oxford Reading				日常生活や余暇の活動
New Crown 1 (三省堂)				特別な行事や季節の活動	
中学2年	NT 1 L10~L14		NT 1 L1~L10		未来や過去の行動
	NT 2 L1~L3			文法問題集	英語劇
		文法問題集	(発音・イントネーション)		
	NT Workbook, Oxford Reading				パブリックスピーキングのスキル
	New Crown 2 (三省堂)				チームワークの奨励)
コース	スタンダード		S アドバンスト		両コース共通
科目	英語	英文法	英語	英文法	英会話
時間/週	3	2	4	2	1
中学3年	NT 2 L5~L12		NT 2 L11~L12		現在完了
	Listening	文法問題集	NT 3 L1~L10		病気・けがの表現
			Listening	文法問題集	意見を述べる
				GV L1~L18	英語劇 (中2と同じ)
	NT Workbook, Oxford Reading				受動態
New Crown 3 (三省堂)					

NT = New Treasure (Z 会)
Listening
= Listening Box Pre (啓林館)
GV
= Grand View English in
30 Stages (数研出版)
検定教科書
New Crown 1, 2, 3 (三省堂)

標を見つけられない状況に陥ってしまう生徒がいるということである。英語学習にも意欲が湧かず、授業担当者は課題未提出者の居残り学習や、再テストなどを行うが、なかなか功を奏しない。昼休みや放課後を使っての根比べといった状態が続く。しかし、6年間という長いスパンで生徒の成長を見続け、チャンスを捉えて将来に目を向けさせるよい励ましができるメリットがあるといえる。

1. 日本人教師による授業

中学1年の初期の指導では、小学校段階で既に学習している生徒はいるが、既修者を別のクラスにするのではなく、全員にアルファベットの指導から始めている。身の回りのことが英語で表現できることを目標に、基本時制、基本的な文型を使ってのコミュニケーションがスムーズに取れるような工夫が中心になる。中学のどのクラスの担当者も、音読の時間を多く取り、個人の練習、ペアワークなどを多用し、体を通して英語を発することを重点的に行う。単語テストやノートのチェック等をこまめに行い、基本的知識の定着を図る。また、英語そのものや外国の文化に興味を持てるよう、テキストの内容に関連する動画などを取り入れたりもする。生徒からリクエストを募り、習った文法事項が歌詞で使われている英語の歌を練習し、テストにその歌詞を出題するなどといったこともある。

S アドコースは進度が速く、また、中3では授業時間が1時間多いため、習得した知識をさまざまな場面で活用し、異文化理解にもつなげてスピーチに挑戦するなど、言語活動の幅が格段に広がる。英文を読む楽しさを味わえるよう、関連のビデオを見せたり、キング牧師のスピーチ等、有名なスピーチの暗唱をしたりもする。音読にも、WPM (Words Per Minute) を取り入れるなど、単調になりがちなりーディング活動に活気を与える工夫もされている。

中1・中2の「英語 LL」では New Treasure 準拠の文法問題集を扱う授業に加えて、CALL 教室での授業がある。生徒は音読練習をすると同時に自分の声を録音し、後で自分自身の読みを聞き直すことや、教師がモニターすることも可能である。また、コンピュータによるランダムを組み合わせてマイクを通してペアワークをさせる

こともできるし、生徒の音読を一斉録音して、リーディングテストをすることも可能である。

中3では両コースとも体系的な文法学習の授業があり、New Treasureの文法問題集あるいはGrand Viewを用いているが、ともすれば演習問題の答え合わせが中心の時間になってしまいがちである。音声や暗唱を取り入れるなど変化をつけ、論理的に英語を学ぶだけでなく、文法知識を有機的に実用に結び付けようという工夫がなされているが、今後もさまざまな工夫や試みが必要な分野であろう。

機器の使用に関しては、普通教室で可動式のプロジェクターやインターネットを使える環境にあるため、さまざまな形で教材を呈示することができる。しかし、教師の側に立ってみると、もっと機器の機能を研究、熟知し、使いこなすことができればという気持ちが強く残るようだ。今後、ICTの活用がさらに求められることは確実であるので、機器の操作方法だけでなく、英語の指導に効果的に取り入れられるよう、研修の機会を持つことが必要だ。そのためには、教員がそれらに参加するゆとりを持てる体制づくりにも工夫を要するところだ。

高校生になると大学進学準備が始まり、使用教材も大きく様変わりする。どの学年も、語彙力や文法の知識・英作文の力を強化しつつリーディング教材に触れさせる努力が見える。また、リスニングにも力を入れている。センター試験でリスニングの問題が、時間で30分、配点も50点(筆記問題は200点)ということで、軽視できない分野になっていることもあり、授業内の時間をやり繰りして、何とかリスニングの時間を確保している。センター試験で扱っている内容は、日常の身近な場面での会話やモノローグを聞いての問題で、コミュニケーション能力を高めることに大いに役立っているので良い傾向といえる。リーディングについても、さまざまな工夫が感じられる。多読・速読・精読などいろいろな手法を使って教材を扱うが、大学入試の問題の形式の変化とも連動して新しい試みがなされている。長文読解も過去の「訳読方式」から抜け出し、直読直解を目指したり、ペア

表2 高等学校英語カリキュラム

コース	スタンダード		S アドバンスト		両コース共通		
科目	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	実用英語		
時間/週	3		3		1		
高校1年	NT3 L1~L9	GV L1~L30	NT3 L9~L12	GV L17~L30	付加疑問/人物描写		
	NT Workbook	Listening (1)	NT4 L1~L6	VQ L1~L12	推量/プレゼンの仕方		
	NT 文法問題集		NT Review Workbook	Listening (1)	ディスカッション/ディベート		
	BD I		NT Practical Workbook				
コース	スタンダード		S アドバンスト				
科目	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	英語演習(選択)		
時間/週	3		3		2		
高校2年	NT 3 L11~L12	GV L22~L30 Optional 3	NT4 L8~L11, NT5 L1~L6	VQ L1~L20	Neo「現代を見る」 Approach (20選) Unit 1~Unit 16 (いっずな書店)		
	NT 4 L1~L6	Vintage 英文法・語法 (いっずな書店), 英作文	スプリーム英語構文(数研出版) Word Navi Level 4500(啓林館)	実践英作文 (日栄社)			
	NT Review Workbook		BD II	Listening (2)			
	NT Practical Workbook	Listening (2)					
BD II							
コース	スタンダード			S アドバンスト			
科目	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	英語コンプリヘンション	英語演習(選択)	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	英語演習(選択)
時間/週	4			2	4		2
高校3年	NT4 L6~L11	ポイント攻略 大学入試英文法 英作文演習 (日栄社)	コンカー英文法 語法・会話演習 (美誠社)	Perfect ナビ 完成編(啓林館)	NT5 L1~L8	ポイント攻略 大学入試英文法 英作文演習 (日栄社)	Neo「現代を読む」 Standard (20選) (いっずな書店)
	NT5				Clues to Reading 英文和訳の徹底 演習(数研出版)		
	入試問題演習 Treasure Hunt 5 (いっずな書店)		BD III				英文法 Express 5 (いっずな書店)
	大学入試過去問	実践英作文 (日栄社)	Link Up 実践編 (数研出版)		実践英作文 (日栄社)		センター演習
		Listening (3)			大学入試過去問	Listening (3)	英作文演習

NT=New Treasure (Z会)

Listening (1)=Listening Box 1(啓林館) Listening (2)=Listening Box 2(啓林館)

Listening (3)=Listening Laboratory Advanced(数研出版)

GV=Grand View English in 30 Stages(数研出版)

検定教科書: BD=Big Dipper(三省堂) VQ=Vision Quest

ワークの音読や、リスニングにつなげたりと苦心が見られる。

特に高2・高3では現代の諸問題を扱う長文読解に取り組む時間を多くとる。New Treasure 4・5の内容は文法項目については既習のものになるためリーディングが中心になるが、充実した内容であるので紹介したい。次の表3では、New Treasure Stage 1～3の文法事項、表4ではStage 4・5のReadingのタイトルを示す。

Stage 4はそれぞれの課にCritical Reading Trainingが、Stage 5はCritical Writing Trainingのセクションが設けられている。

進学準備が大きな比重を占めるようになってくる高2・高3にかけては、担当者の悩みは一層大きくなる。テ

表3

	New Treasure 1		New Treasure 2		New Treasure 3
1	be 動詞の文 1	1	助動詞表現／文の構造 1	1	現在完了／現在完了進行形
2	be 動詞の文 2	2	不定詞		過去完了／過去完了進行形
3	一般動詞の文 1	3	副詞節を導く接続詞	2	使役動詞／知覚動詞
4	単数と複数	4	名詞節を導く接続詞／文の構造 2	3	助動詞の発展的用法／助動詞 + have + 過去分詞
5	動詞 (3 単現)	5	動名詞		would, used to, ought to など
	疑問詞 1	6	現在完了	4	副詞節
6	疑問詞 2	7	受動態	5	関係代名詞 whose, what／制限用法／非制限用法
7	命令文	8	名詞 不定代名詞／再帰代名詞	6	関係副詞／関係代名詞と前置詞
	can を用いた文	9	後置修飾／分詞による修飾	7	疑問詞に導かれた名詞節
8	再帰代名詞	10	関係代名詞		if/whether 名詞節, It～that...
9	一般動詞の過去形	11	不定詞の発展的用法	8	不定詞の発展的用法／SVO + to...／疑問詞 + to
10	be 動詞の過去形	12	比較／間接疑問／感嘆文		It～for to.../It～of to...／完了不定詞
11	be going to			9	分詞・分詞構文
12	いろいろな助動詞			10	受動態の発展的用法
13	There is [are]...			11	仮定法
14	比較			12	強調・否定・倒置

表4 Stage 4 (First Edition) Stage 5 (First Edition)

Crossing the Alps by Rail (論説：建築・文化) 人類史上初めてアルプスを越えた鉄道	The Hopes Contained in the National Anthem of South Africa 複数の言語で構成されている南アフリカ国家の背景(論説：社会問題)
The Hero who Refused to Be a Hero (伝記：偉人) 2,500 人のユダヤ人の子供たちを救った「英雄」	The Value of the Ig Nobel Prizes (論説：自然科学) イグノーベル賞から考える科学研究の大切さ
Different Styles of Encouragement 日米の「励まし方」の違い (エッセイ：文化・教育)	The Effects of Too Many Choices (論説：社会心理) 選択肢が多いことが与える影響
Biodiversity — Nature in the Balance 生物多様性と屋久島の自然 (論説：自然・環境)	The Woman Who Loved Refugees (伝記：医療・社会問題) ソマリア難民を支援し、共に暮らした医師の生涯
Curling — Chess on Ice (論説：スポーツ) 「氷上のチェス」カーリング	Secret Codes in Your Pocket (論説：商業・情報) 身のまわりにある数字と記号
Popularity Breeds Popularity (論説：経済) ネットワークがもたらす経済効果	Life on the Ocean Sea コロンブスの航海 New Advances in Tuna Cultivation (論説：自然・環境)
Executed, But Not Proved Guilty? (物語：社会問題) 有罪か、無罪か — サッコ・ヴァンゼッティ事件	食文化を守るマグロの養殖技術 “Education Fever” in South Korea (論説：学校・教育)
False Faces — Reversing Assumptions 思考の「壁」を取り除く (論説：論理・思考)	韓国の教育事情 Laboratory Animals Go Hi-tech (論説：健康・医療)
Pitfalls in Speech (論説：言語・コミュニケーション) 言葉に潜む「落とし穴」	「ノックアウトラット」の開発 What Can We Learn from Art? (論説：文化・歴史)
The History of Maps (論説：人類・歴史) 地図の歴史から人類の発達を読み解く	芸術が社会に与える影響 The Problem of Consciousness (論説：哲学)
The Health Gap in Australia (論説：健康・医療) オーストラリアで見られる健康格差	「意識」の不思議と脳科学 One More Thing レイモンドカーヴァーの短編集より

キストの英文を読むだけでなく、関連する新聞記事や映画などを見せて英語を通じて世界の諸問題に関心を持てるような展開を心掛ける。しかし、やはり課題は多いようだ。基本的な事項を定着させ、応用にもっていくことの難しさ、知識としての文法を使って英文を読み、書くことの楽しさを実感させたいと願いつつ授業をするが、なかなか生徒には伝わらないこと、インプットに留まらず、アウトプットにも広げたいという思いはあっても、時間のゆとりがないこと、等々である。

もうひとつの問題は、やはり教師にとっての過重な負担ではないだろうか。アンケートの回答から、英語教員たちが、全力で目前の課題と格闘していることがよくわかるが、客観的に見て、余りにも忙しく、余裕がないことを感じる。生徒のニーズに応えるため、私立大学入試、センター試験対策から国公立の二次対策までを視野に入れねばならず、また入学試験の形式も指定校推薦、AO入試を始めとして多種多様である。自己推薦文や英作文の添削などの個別指導等も加わる。懇切な指導をすれば目に見えて生徒のモチベーションが上がり、成績も伸びるということを実感するため、やりがいはあるが忙しさは増す。

その他、高3特有の悩みは、進学先が決まる時期が生徒によって違うため、1クラスの中で個々の生徒の意欲のレベルが大きく違ってくるといことだ。その一方で、生徒の中には予備校や塾などに頼りたいという気持ちの強い生徒もあり、学校の果たす役割を改めて考えさせられる現象は続く。

2. ネイティブ教師による英会話、実用英語の授業

中学1年～3年で英会話、高校1年で実用英語の授業があり、各クラスを2分割し、2名の専任のネイティブ英語教師(アメリカ人とニュージーランド人)と、1名の非常勤のネイティブ講師(アメリカ人)が日本人英語教師とティームティーチングで授業を行う。他の英語の授業と同様の文法事項を含む内容を、多くの自主教材を用いて行っている。ペアワークやグループワークで会話やスキットを作り、練習や発表の時間を持つ。幸い、この2名の専任のネイティブ教師は、非常に綿密な計画のもと、段階を踏んだ言語活動や、変化に富んだ反復練習により、生徒に自信を持って発言させることに心を砕いている。もっと自然な英語らしい発音を身につけさせること、習った文法の知識を応用してもっと自由に自分の考えを表現できるようにということが今後の課題と考えている。日本人教師による他の英語の授業でも、空所補充の問題や和文英訳に留まらず、そういった点をもっと強調すべきであるとも考える。

ひとつ気になる点は、小学校で英語に触れる割合が大きくなっていることが、中学の教室でも感じられるのであるが、その英語がカタカナ英語の発音であったり、表現が知識としてあるだけで、場面の中で機能的に使えないなどの問題も指摘されている。あるいは、英語にもゲームにも新鮮味を感じないといった状態に気づくこともあるようだ。それでは小学校で英語を教える意味がないのではないか。英語を楽しく学べる機会にするためにはどうすればよいか、小学校での英語の授業のあり方、小・中の連携など、真剣に取り組むべき問題だ。

しかし、ここ数年職員室に生徒がやってきて、ネイティブ教員に英検の2次対策の指導を依頼したり、部活動の用事で話しかけるときに、当然のように英語でコミュニケーションをとっているのは喜ばしいことだ。それだけ、英語でのコミュニケーションに対するハードルが下がっているということかもしれない。

特筆すべきは、中2、中3の2学期に実施する英語劇コンテストであろう。数名ずつの小グループを作り、中2は *Sleeping Beauty*、中3は *Peter Pan* を5つのパートに分けて、1パートずつ、5クラスの代表チームが演じてストーリーが完結する。2学期いっぱいを使って、劇の内容理解から、グループ分け、セリフの暗記テスト、演技の練習など、本番直前に代表が決まるまで、休日にも登校し、熱心に練習を重ねる。賞がかかっていることもあり、グループ内で協力し合い、チームワークを発揮して、余り意欲的でない生徒も、英語が得意で熱心に取り組む生徒に引張られて、発音や演技に短期間で素晴らしい成長を遂げる。

また、ネイティブ教師はアンケートの回答の中で次のような提案をしている。

- Can-do リストを明示し、生徒自身がどの段階まで進めたかを意識できるようにする。
- 生徒に自分の学習に対する責任をもっと感じさせる。
- もっとアクティブに学ばせる。アクティブ・ラーニングは、言語に「ついて」だけでなく、「使い」「行動する」ために学ぶという点で、言語学習には非常に効果的であり、生徒たちはより多くを学ぶであろう。

これらの提案を真摯に受け止め、英語科全体の教育に融合させることができれば、現状から一歩前進することができるのではないだろうか。

3. 国際理解教育について

国際理解教育は、1960年代にアメリカとの交換留学を開始して以来、相手校や国など、さまざまな変遷を経ながら今に続いている。アメリカに1年間の留学が通常の留学であった時代が20年以上続いた。その後アメリカに加えてニュージーランドに姉妹校を持った時期が数年続き、現在はドイツ、イギリス、アメリカ、オーストラリア、韓国の学校に留学することが可能で、その期間も1年間、4か月、2か月、あるいは1～2週間と変化に富んでいる。また、受け入れの方も、それぞれの学校の希望を尊重して行っている。これらの学校とは、協定書を交わし、費用の負担、各校の責任、保護者、本人の責任を明らかにしている。その他、AFSやYFUなどの留学機関を通して留学する生徒もいる。

1年間の留学の場合、「留学のきまり」の規定通りに成績がそれぞれのコースで学年の中位以上であれば、留学先の学校での学習が単位として認定され、留学中に進級することができる。留学を希望している生徒は、留学を考え始めた時点で規定の成績に届いていない場合には、夢の実現を目指して必死の努力を続ける。多くの生徒は明確な目標を持つことで大きな成長を遂げるので、留学が自分自身を見つめ直す原動力になり得るのを強く感じる。言葉の壁を越えて友達の中に入り込んで行き、周囲の人々の助けを借りながら困難な状況を乗り越え、著しい成長をして帰国する。2週間の短いホームステイであっても、動機づけという点では効果が長く持続しているようだ。生活の中で英語を使って過ごす時間が長いため、学校に戻ってからも英語を使う場面でリラックスし、積極的な態度で臨めるようになる。この傾向は比較的おとなしい生徒についても顕著であると、ネイティブ教員からも報告されている。

例年6月に留学説明会を開くが、希望者は保護者と共に説明会に参加する。その上で、自分自身の将来の計画に合うものを選んで留学を申し込む。短期の研修旅行についても、2月～3月に説明会を開いて募集を始める。プログラムにより、選考の仕方は異なるが、応募動機を日本語と英語で書いたり、面接を受けるなどして参加者が決まる。特徴は3～4か月にわたり、十分な準備活動を行うということだ。ほとんどの生徒にとって初めて親元を離れての生活となる。自律的な生活習慣のあり方、ホームステイをする上での注意事項、ネイティブ教師によるホームステイイングリッシュや、日本の学校、日本文化についてのプレゼンの準備など、忙しい日常の合間をぬって行う。何度か研修旅行を引率し、生徒たちの活動や変化を間近に観察する機会があったが、どの研修旅行でも、準備活動が活かされ、実際の旅行は短くとも、充実した研修旅行になっていることが感じられた。

それら海外プログラムに加えて、中学1年の2月には国内で1泊2日のイングリッシュ・キャンプに全員が参加する。15人以下の小グループに分かれ、ネイティブの英語講師による授業と大阪近郊の大学に留学中の学生たちとの異文化交流の時間を持つ。その留学生たちは、普段あまり馴染みのない無いらしいアジア、アフリカの学生も多く、彼らの国々や文化について触れ、学んだことを模造紙にまとめ、英語で発表する。留学生と英語でコミュニケーションをとること、お互いに協力して絵なども用いてわかりやすくまとめることなど、忙しくも充実した時間を過ごす。

また、国際教育係を長く担当して強く感じたもう一点は、「受け入れ」の意義深さである。海外留学は留学する生徒本人にとっての異文化体験の貴重な機会になるが、「受け入れ」はクラス、学年、学校全体にとって大きな刺激になるということを目の当たりにすることが多い。中期、長期の留学生は高校2年生で受け入れ、1～2週間の場合は、基本的にホストファミリーの生徒のクラスに入り、一緒に授業を受ける。時間割については、それぞれの留学生の日本語能力と希望に応じて考える。昼休みや掃除の時間、クラブ活動に参加したり、茶道や書道などの特別プログラムを用意したりもする。留学生のための日本語の時間を週4時間とっているが、留学生間でレベルの差が大きい場合は一緒に授業を受けるには不都合があり、ボランティアの指導者の助けも借りる。また、甲南女子大からの援助も大変ありがたい。対外協力センターで学生のボランティアを募集していただき、週に2回図書館で会話を中心とした日本語の指導をしていただく。留学生にとっては、女子大生との会話は年齢が近いだけに、教師による指導とは違った楽しさがあるようだ。大学で企画される歓迎会や遠足にも参加させてもらって

いる。

それらに加えて、他の学年の英語の授業や総合学習の時間にゲストとして参加してもらったりもするので、どのような交流の時間を持つか、いくつか紹介したい。

- 留学生たちに、自分の国での学校生活、街、食べ物などをパワーポイントを使いプレゼンをしてもらう。
- 小グループに分けて互いに自己紹介をし、余暇の過ごし方など、身近な事柄について話し合う。日本語を学んでいる生徒も多いので、日本語タイム、英語タイムに分けて行うこともある。来日する生徒の多くは、日本のアニメファンであることが多く、アニメやマンガ、音楽の話など、大いに盛り上がる。
- 外国のゲームを紹介してもらい、一緒に遊ぶ時間を作る。等々

この交流の場は、日本の生徒にとって、ただの練習ではない生きた英語に触れ、本物のコミュニケーションをとる機会になる。自分の英語が通じたという喜びは生徒の英語学習への大きな動機づけになっている。日常の英語の授業ではそれほど熱心ではない生徒も、生き生きとした表情でコミュニケーションをとる姿が見られることも多い。また、外国からの生徒の中には、日本語がとても上手な生徒もおり、それも大きな刺激となる。授業以外の学校生活の中のさまざまな場面で、同年代の生徒ならではの楽しい交流の場が広がる。

この交流は、生徒にとどまらず、ホストファミリーを始めとする保護者にも広がる。育友会の組織の中に国際交流委員会があり、委員長を中心に各学年のお母さんたちが見事なチームワークで交流の機会を計画して下さる。20名以上もの外国の生徒が訪問することもあるが、全員に着物を着せ、髪をきれいに整え、記念写真を折り紙で装飾した手作りの枠に入れて、お土産として持って帰らせる。この行事は、準備も当日の作業も大変であるが、留学生にとっては日本旅行のハイライトともいえるものになっている。彼女たちの大喜びの顔を見て、委員の方たちも満足して下さるようだ。以上述べたように、さまざまな立場の人々を巻き込んだ活動に発展したのも、多くの人々の善意の賜物だ。

現在、実施している派遣プログラムと受け入れプログラムを表5で示す。

留学・海外研修旅行中の生徒の様子



オーストラリア留学中のランチタイム



カナダ キャンモアのシニアセンターで交流

表5 派遣・受入プログラム一覧

派遣	学校名	国・都市	時期	協定提携日
長期	ディートリッヒ・ボンヘファー・ギムナジウム	ドイツ・ヒルデン	9月～7月	2004/3/22
	クィーンズウッド・スクール	イギリス・ハートフィールド	9月～7月	2011/9/1
中期	セントマーガレッツ・アングリカン・ガールズ・スクール	オーストラリア・ブリスベン	7月中旬から2か月	2008/4/12
	エマ・ウィラード・スクール	アメリカ・トロイ	9月～12月	2015/4/1
短期	カナダ・ホームステイ	カナダ・キャンモア	夏期休暇	
	オーストラリア研修旅行	オーストラリア・シドニー、ブリスベン	夏期休暇	
	南洋女子中学校	シンガポール	夏期休暇	
	培花女子高等学校	韓国・ソウル	夏期休暇	2016/4月

受入	学校名	国・都市	時期		協定提携日
長期	ディートリッヒ・ボンヘファー・ギムナジウム	ドイツ・ヒルデン	9月～7月		2004/3/22
中期	セントマーガレッツ・アングリカン・ガールズ・スクール	オーストラリア・ブリスベン	10月・11月		2008/4/12
短期	ル・ジャルダン・アカデミー	アメリカ・ハワイ・カイルア	6月2週間	毎年	
	シドニー・ガールズ・スクール	オーストラリア・シドニー	9月1週間	毎年隔年	
	クィーンズウッド・スクール	イギリス・ハートフィールド	10月3日間	不定期	2011/9/1
	セントヘレンズ・スクール	イギリス・ロンドン	10月8日間	ほぼ毎年	
	セントマーガレッツ・アングリカン・ガールズ・スクール	イギリス・ロンドン	12月5日間	不定期	
	培花女子高等学校	韓国・ソウル	1月3日間 2月2週間	毎年 不定期	2016/4月

受入留学生の交流風景



イギリス セントヘレンズの学校生活を紹介



イギリスからの留学生をクラスに迎えて



オーストラリア セントマーガレッツの留学生の日本文化体験

おわりに

以上示してきた甲南女子の英語教育を、さらに発展させるための問題点をまとめてみると、学校として全カリキュラムを常に流動的に考える必要があることを痛感する。即ち、

- ◇教員の人数，構成，時間割の一層の適正化
- ◇他教科との連携の必要性
- ◇大学入試のための英語教育と進学塾との問題
- ◇社会の変化，要求の多様化への対応（生徒，保護者の要望の変化）

などの点が浮かび上がる。

目指すべき大きなゴールは明確であるが、そこに至るにはさまざまな障害があり、それらをどう乗り越えるかということが問題になっている。しかし、今後も生徒たちが、自分の学習に自信と責任を持ち、さらにアクティブになるならば、教室内で教えられることだけに留まらず、もっと多くのことをもっと速く、自ら学ぶ姿勢が生まれることだろう。課題は多いが、今後も生徒たちの成長を楽しみに見守りたい。